動機・様式・技能の三側面から見たコミュニケーション尺度の提案

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 川上, 正浩, 大津, 江里子, 福本, 萌, 村上, 法子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4783

動機・様式・技能の三側面から見たコミュニケーション尺度の提案

川上正浩※1／大津江里子※2／福本萌※2／村上法子※2
※1 臨床心理学専攻教授・※2 臨床心理学専攻修士課程２回

要約
本研究では，現代大学生のコミュニケーションについて検討するため，彼らのコミュニケーションの様態について測定するための尺度を構成することを目的とした。個人が特定のコミュニケーションのスタイル（様式）を採ったり，あるいは特定のコミュニケーションのスキル（技能）を身につけようと努力したりするのは，そのコミュニケーション・スタイルあるいはスキルが，実際のコミュニケーションの場面において有効に働くだろうという信念（動機：モティベーション）に基づいてのことであると想定される。そこで本研究では，同一の項目を用いて，個人のコミュニケーションのスタイル，スキル，モティベーションの三者を測定し，これらの関係について明らかにすることを目指した。大学生497名を対象とした調査と因子分析の結果，コミュニケーションの動機・様式・技能それぞれについて，類似はしているが完全には一致していない各々の下位尺度が報告された。また，相関係数により，各下位尺度間の関係についても吟味がなされた。

キー・ワード：コミュニケーション，モティベーション，スタイル，スキル

問題と目的

携帯電話の普及や，インターネットの発達と合わせて，現代の若者のコミュニケーション能力が低下している，との議論がなされている（たとえば風間，2009；西迫ら，2007；三宮，2004a，2004b）。一方で川浦（2008）のように，携帯電話（特にカメラ付き携帯電話）の普及に大学生が主観的効用を感じていることを示した研究や，携帯電話の使用が必ずしも対人関係の希薄化をもたらすものではないことを示した研究（山本ら，2008）もある。足立ら（2003）によれば，大学生にとって携帯電話はもっとも身近なコミュニケーション・メディアであり，大学生は携帯電話を用いて心理的に親しみを持つ依存対象とコミュニケーションを行っている。また岡本ら（2003）は，携帯電話と携帯メールといったコミュニケーション・メディアに対して大学生のコミュニケーション観が異なっていることを示している。さらに川口ら（2000）は質問紙調査を用いて大学生がコミュニケーション・メディアである携帯電話を，伝達相手に応じて適切に使い分けていることを示している。

携帯電話あるいはインターネットといったコミュニケーション・メディアそのものの発達や浸透と，コミュニケーション能力との因果関係については，まだまだ検討の余地があるが，現代の若者のコミュニケーションに関する“問題”が多くの場面で取り上げられている（たとえば藤田，2005；平尾ら，2007；飯塚，2004；磯ら，2005；金城，2006；牧野，2009a，2009b，2010；尾上，2006）。たとえば高井（2008）は，大学生を対象に人間関係についての悩みに関する自由記述を求めた。そこで挙げられる人間関係についての悩みの内容は，「対人スキル不足・コミュニケーション・スキル不足」が「性格領域」に分類されるものに次ぐ形で挙げられている。また白井（2006）は現代青年の友人関係の“希薄化”を問題として取り上げ，具体的な会話の分析を通してこの問題にアプローチしている。

本研究では，現代大学生のコミュニケーションについて検討するため，彼らのコミュニケーションの様態について測定するための尺度を構成することを目的とする。コミュニケーションの概念そのものは多義的である。たとえば三宮（2004b）は，コミュニケーションを，“言語および非言語情報の送受信”としている。しかし，たとえば牧野（2009a）が，“コミュニケーション・スキル”を“日常生活において対人関係を円滑にするために必要なかつ適切な直接的技術とその知識”と定義しているように，通常コミュニケーションは，情報が伝達されれば達成されると言うよりは，情報伝達が円滑に，そして適切になされることによって達成されると考えられているのではないだろうか。そしてこのことは，コミュニケーションに対して何が適切であると考えるのかといった個人差の存在を意識させる。

これまで，どのようなコミュニケーションの取り方を“している”のか（本研究ではこれを“スタイル（様式）”と表現する）に着目してコミュニケーションの“実態”を明らかにしようとする研究や，自分の技能としてのコミュニケーション，すなわち，自分がそれをどのくらい“得意としている”のか（本研究ではこれを“スキル（技能）”と表現する）に着目して，技能としてのコミュニケーションについて明らかにしようとする研究が認められる。しかし，これらの研究は，研究者の関心により，それぞれの文脈で独立して行われており，統合した形での研究はなされていない。さらに，先述の，どのようなコミュニケーションを“適切だと考えている”のか，あるいは“重要だと考えている”のかについても併せて考えることは重要である。本研究ではこの，どのようなコミュニケーションのとり方を重要あるいは適切だと考えているのか，を“モティベーション（動機）”と表現する。

個人が特定のコミュニケーションのスタイルを採ったり，あるいは特定のコミュニケーションのスキルを身につけようと努力したりするのは，そのコミュニケーション・スタイルあるいはスキルが，実際のコミュニケーションの場面において有効に働くだろうという信念に基づいてのことであろうと想定される。たとえば，「初対面の人に気軽に話しかける」というスタイルを採る人は，採らない人に較べて，そのことが自分のコミュニケーション，あるいは生活にとって有益あるいは必要であると考えているであろう。特に，スキルとの関係から考えれば，特定のスキル（たとえば「初対面の人に気軽に話しかける」スキル）を有すると自覚している個人が，実際にはそうしたコミュニケーション・スタイルを採らないとすれば，それは，その個人が，そのスタイルを採ることを，自分のコミュニケーションや生活にとって有益である，あるいは必要であるとは考えていないからであると想定されるだろう。

同様に，「自分の深い話をする」というコミュニケーションのスタイルは，「深い話をしてこそ，コミュニケーションが深まる（したがってより適切なコミュニケーションのスタイルである）」と考える個人にとっては，より頻繁に採られる方略となると想定されるが，「他者にあまり深い話をするのは，相手に負担をかけることになってしまう（したがってあまり適切なコミュニケーションのスタイルではない）。」と考える個人にとっては避けられがちなスタイルになるであろう。

したがって，個人が特定のコミュニケーションのスタイルを採ることや採らないことの背景には，その個人のそのコミュニケーション・スタイルに対する価値観やモティベーションが存在している。そこで本研究では，この“モティベーション”を，先のスタイル，スキルと併せてコミュニケーションを考える一つの観点として設定し，同一の項目に対して3通りの問い方をすることにより，現代大学生のコミュニケーションをより立体的に把握することを目的とする。

藤本ら（2007）は，コミュニケーション・スキルという文脈において，このコミュニケーション・スキルを能力と指向性から捉えることを提唱した。彼らの言う“能力”が本研究における“スキル”に，彼らの言う“指向性”が本研究における“スタイル”に相当すると考えられる。

以上のように本研究では，同一の項目を用いて，個人のコミュニケーションのスタイル，スキル，モティベーションの三者を測定し，これらの関係について明らかにすることを目的とする。具体的な項目について

は，主に大学生を対象としたコミュニケーション・スタイル，コミュニケーション・スキルに関する先行研究を参考に構成する。

方法

調査対象者

大阪府のOK大学，奈良県のOS大学，愛知県のNF大学，NG大学に所属する大学生497名（男性156名，女性341名，平均年齢20.5歳：SD = 2.2）が調査に参加した。

調査時期

調査は2009年6月から2010年9月に実施された。

調査方法

講義時間中に担当教員が質問紙を配布し，調査対象者にはその場で回答することが求められた。質問紙はその場で回収された。

調査内容

コミュニケーションに関する複数の尺度（藤本ら，2007；藤本，2008；尾崎ら，2006など）を参考に，表1に示す24項目の質問項目を作成した。これらに対して，（1）人間関係において，重要であると思うか（動機），（2）人間関係において，実践しているか（様式），（3）あなた自身が得意としているか（技能），について，順に尋ねた。すなわち，大問1では，その項目が重要であると思うかどうかについて，5件法（1：重要でない～5：重要である）で，大問2では，実践しているかどうかについて，5件法（1：そうしていない～5：そうしている）で，大問3では，調査参加者自身が得意としているかどうかについて，5件法（1：苦手である～5：得意である）で，それぞれ尋ねた。

表1　本研究で使用された項目一覧

項目
1. 相手の考えを言葉から読み取る
2. 自分の感情をコントロールする
3. 初めて会う人との集まりに積極的に参加する
4. 友好的な態度で相手に接する
5. 人間関係を第一に考えて行動する
6. 自分の気持ちを表情やしぐさで表現する
7. 相手が会話の主導権を持てるよう配慮する
8. 意見の対立を解決するよう心がける
9. 相手の意見や立場に共感する
10. 相手のプライバシーに踏み込まない
11. まわりの期待に応じた振る舞いをする
12. 相手の意見や立場を尊重する
13. 相手のために自分を犠牲にする
14. 相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る
15. 一人の友だちと特別親しくするよりグループで仲良くする
16. 自分の衝動や欲求を抑える
17. 相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする
18. 自分の主張を論理的に説明する
19. 相手を傷つけないよう気を遣う
20. 気まずいことがあった相手と和解する
21. 会話の主導権を握って話を進める
22. 相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける
23. 自分の考えを言葉で表現する
24. 相手を楽しませるために気を遣う

結果と考察

大問ごとに24項目を対象に重み付けのない最小自乗法，プロマックス回転による因子分析を行った。因子の解釈可能性や，どの因子にも因子負荷量が|.35|未満であること，複数の因子に対して負荷量が|.35|以上であることなどを考慮して，項目の削除を行ったうえで因子分析を繰り返し，因子抽出を行った。ただし，最終的に抽出された因子においては，負荷量が|.35|に満たないものも含まれている。これは下位尺度構成における信頼性係数を考慮し，負荷量が|.30|以上であることを確認したうえで，当該項目を加えることが下位尺度の信頼性係数向上に寄与する場合には削除しないという方針に基づくものである。こうした処理の結果，動機については19項目からなる5因子解，様式については24項目からなる5因子解，技能については20項目からなる6因子解が得られた。各々の因子分析表については表2～表4に示し，以下にそれぞれの因子について詳述する。

表２　動機に関する因子分析結果

	I	II	III	IV	V
I. 相手への配慮　（ 6項目：α ＝ .643 ）					
相手のために自分を犠牲にする	**.560**	.019	-.142	-.052	.104
相手の意見や立場を尊重する	**.487**	.020	.268	.094	-.181
相手のプライバシーに踏み込まない	**.458**	-.073	.033	.156	-.091
相手が会話の主導権を持てるよう配慮する	**.457**	.118	.001	.037	-.022
まわりの期待に応じた振る舞いをする	**.430**	.046	-.014	-.140	.219
自分の衝動や欲求を抑える	**.417**	-.007	.018	-.068	.005
II. 関係維持　（ 6項目・α ＝ .675 ）					
相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける	-.033	**.554**	.122	-.076	.062
一人の友だちと特別親しくするよりグループで仲良くする	.021	**.542**	-.198	-.165	.065
意見の対立を解決するよう心がける	.187	**.499**	-.129	.137	-.165
人間関係を第一に考えて行動する	.128	**.463**	.135	-.068	.080
気まずいことがあった相手と和解する	-.123	**.434**	-.054	.275	.045
友好的な態度で相手に接する	-.005	**.418**	.140	.058	.026
III. 読み取り　（ 2項目：α ＝ .666 ）					
相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る	-.043	-.019	**.881**	-.093	.069
相手の考えを言葉から読み取る	.023	-.073	**.626**	.004	.017
IV. 自己表現　（ 3項目：α ＝ .500 ）					
自分の考えを言葉で表現する	-.056	-.040	-.077	**.740**	.088
自分の主張を論理的に説明する	.178	-.123	-.009	**.450**	.182
自分の気持ちを表情やしぐさで表現する	-.106	.207	.223	**.306**	-.052
V. 気遣い　（ 2項目：α ＝ .641 ）					
相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする	-.101	.031	.053	.138	**.691**
相手を楽しませるために気を遣う	.209	.038	.024	.092	**.553**

表３　様式に関する因子分析結果

	I	II	III	IV	V
I. 相手への配慮　（ 7項目：α ＝ .782 ）					
相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る	**.703**	-.224	-.043	.110	.099
相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける	**.568**	.150	.137	-.076	-.105
相手を傷つけないよう気を遣う	**.567**	.080	.098	-.113	-.019
相手の意見や立場を尊重する	**.559**	.101	-.026	-.001	.050
相手の意見や立場に共感する	**.530**	.228	-.045	-.018	-.119
相手の考えを言葉から読み取る	**.513**	-.268	.022	.170	.233
友好的な態度で相手に接する	**.335**	.246	.182	.065	-.078
II. 関係維持　（ 5項目：α ＝ .671 ）					
意見の対立を解決するよう心がける	.210	**.565**	-.201	.163	.055
相手が会話の主導権を持てるよう配慮する	-.029	**.500**	.008	.066	.206
一人の友だちと特別親しくするよりグループで仲良くする	-.114	**.484**	.035	.001	.036
気まずいことがあった相手と和解する	.281	**.415**	-.096	.080	-.021
人間関係を第一に考えて行動する	.271	**.309**	.217	-.046	.012
III. 気遣い　（ 4項目：α ＝ .660 ）					
相手を楽しませるために気を遣う	.204	-.121	**.750**	.034	-.028
相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする	-.115	-.070	**.701**	.103	-.006
まわりの期待に応じた振る舞いをする	.161	.137	**.329**	-.103	.064
相手のために自分を犠牲にする	.051	.179	**.321**	-.148	.185
IV. 積極的表現　（ 5項目：α ＝ .627 ）					
自分の考えを言葉で表現する	.171	-.062	-.006	**.585**	-.054
自分の主張を論理的に説明する	.012	.022	-.009	**.513**	.076
会話の主導権を握って話を進める	-.286	.200	.250	**.447**	-.026
自分の気持ちを表情やしぐさで表現する	.038	.197	-.026	**.429**	-.107
初めて会う人との集まりに積極的に参加する	-.066	.335	.043	**.336**	.041
V. 自己統制　（ 3項目：α ＝ .544 ）					
自分の衝動や欲求を抑える	-.120	.241	.062	-.056	**.576**
自分の感情をコントロールする	.080	-.003	.044	.042	**.507**
相手のプライバシーに踏み込まない	.161	.199	-.135	-.097	**.307**

表４　技能に関する因子分析結果

	I	II	III	IV	V	VI
I. 相手への配慮　（ 7項目：α ＝ .745 ）						
相手の意見や立場に共感する	**.751**	-.029	-.050	-.185	-.136	.123
相手の意見や立場を尊重する	**.658**	.029	.036	-.022	-.036	.021
意見の対立を解決するよう心がける	**.544**	.202	-.148	-.002	.023	.010
相手が会話の主導権を持てるよう配慮する	**.446**	-.036	-.018	.083	.073	-.049
相手のプライバシーに踏み込まない	**.425**	.001	-.022	.037	.139	-.259
相手を傷つけないよう気を遣う	**.409**	-.068	.196	.203	.092	-.035
相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける	**.393**	-.024	.012	.181	.014	.180
II. 自己表現　（ 4項目：α ＝ .718 ）						
自分の主張を論理的に説明する	.104	**.752**	.012	-.042	.083	-.205
自分の考えを言葉で表現する	.028	**.726**	.072	-.001	.024	.045
会話の主導権を握って話を進める	-.161	**.538**	-.083	.129	-.032	.150
自分の気持ちを表情やしぐさで表現する	.096	**.396**	.156	.011	-.159	.131
III. 読み取り　（ 2項目：α ＝ .780 ）						
相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る	-.006	-.029	**1.030**	-.057	-.052	-.040
相手の考えを言葉から読み取る	-.081	.148	**.618**	.007	.080	.073
IV. 気遣い　（ 2項目：α ＝ .766 ）						
相手を楽しませるために気を遣う	.034	-.026	-.005	**.964**	-.041	-.038
相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする	-.025	.111	-.064	**.608**	-.039	.068
V. 自己統制　（ 2項目：α ＝ .753 ）						
自分の衝動や欲求を抑える	-.033	-.046	.047	.037	**.850**	.020
自分の感情をコントロールする	.052	.065	-.051	-.126	**.699**	.125
VI. 関係構築・維持　（ 3項目：α ＝ .635 ）						
友好的な態度で相手に接する	.063	-.064	.009	-.053	.091	**.834**
初めて会う人との集まりに積極的に参加する	-.112	.186	-.024	.068	.031	**.523**
人間関係を第一に考えて行動する	.223	-.110	.044	.127	.021	**.358**

動機に関する因子分析

第1因子は「相手のために自分を犠牲にする」「相手のプライバシーに踏み込まない」「自分の衝動や欲求を抑える」などの項目において因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて周囲やその期待を尊重し，自分を犠牲にすることが重要であるとの考え方にかかわる因子と考えられるため，“自己犠牲”因子と命名した。

第2因子は「相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける」「一人の友だちと特別親しくするよりグループで仲良くする」「人間関係を第一に考えて行動する」などの項目において因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて，個人対個人というよりも友人集団の全体的な関係性を重視する考え方にかかわる因子と考えられるため，“関係維持”因子と命名した。

第3因子は「相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る」「相手の考えを言葉から読み取る」の２項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて，相手の状態をモニターすることが重要であるとの考え方にかかわる因子と考えられるため，“読み取り”因子と命名した。

第4因子は「自分の考えを言葉で表現する」「自分の主張を論理的に説明する」などの項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいては自己表現が重要であるとの考え方にかかわる因子と考えられるため，“自己表現”因子と命名した。

第5因子は「相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする」「相手を楽しませるために気を遣う」の2項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいては相手に気を遣うことが重要であるとの考え方にかかわる因子と考えられるため，“気遣い”因子と命名した。

様式に関する因子分析

第1因子は「相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る」「相手との関係を良好な状態に維持するよう心がける」「相手の意見や立場を尊重する」などの項目において因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて相手に配慮するスタイルにかかわる因子と考えられるため，“相手への配慮”因子と命名した。

第2因子は「意見の対立を解決するよう心がける」「一人の友だちと特別親しくするよりグループで仲良くする」「気まずいことがあった相手と和解する」などの項目において因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて関係性を維持するスタイルにかかわる因子と考えられるため，“関係維持”因子と命名した。

第3因子は「相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする」「相手を楽しませるために気を遣う」「まわりの期待に応じた振る舞いをする」などの項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいては相手に気を遣うスタイルにかかわる因子と考えられるため，“気遣い”因子と命名した。

第4因子は「自分の考えを言葉で表現する」「自分の主張を論理的に説明する」「会話の主導権を握って話を進める」などの項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいては積極的に自己を表現するスタイルにかかわる因子と考えられるため，“積極的表現”因子と命名した。

第5因子は「自分の衝動や欲求を抑える」「自分の感情をコントロールする」「相手のプライバシーに踏み込まない」の3項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて自己を抑制することにかかわる因子と考えられるため，“自己抑制”因子と命名した。

技能に関する因子分析

第1因子は「相手の意見や立場に共感する」「相手のプライバシーに踏み込まない」「相手が会話の主導権を持てるよう配慮する」などの項目において因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて相手に気遣い対立を回避する技能にかかわる因子と考えられるため，“対立回避”因子と命名した。

第2因子は「自分の主張を論理的に説明する」「自分の考えを言葉で表現する」「会話の主導権を握って話を進める」などの項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいては自己を表現する技能にかかわる因子と考えられるため，“自己表現”因子と命名した。

第3因子は「相手の気持ちを表情やしぐさから読み取る」「相手の考えを言葉から読み取る」の2項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて，相手の状態をモニターする技能にかかわる因子と考えられるため，“読み取り”因子と命名した。

第4因子は「相手を楽しませるために，冗談を言ったりウケるようなことをしたりする」「相手を楽しませるために気を遣う」の2項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて相手を楽しませる技能にかかわる因子と考えられるため，“気遣い”因子と命名した。

第5因子は「自分の衝動や欲求を抑える」「自分の感情をコントロールする」の2項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて自己を抑制する技能にかかわる因子と考えられるため，“自己抑制”因子と命名した。

第6因子は「友好的な態度で相手に接する」「初めて会う人との集まりに積極的に参加する」「人間関係を第一に考えて行動する」の3項目に因子負荷が高く，コミュニケーションにおいて，新しい関係を構築したり，関係性を維持したりする技能にかかわる因子と考えられるため，“関係構築・維持”因子と命名した。

下位尺度間の相関係数の分析

以下では，下位尺度間の相関に基づき，コミュニケーション尺度の構造について検討する。まず，動機，様式，技能それぞれの大問内での相関係数を吟味し，その後，大問間での相関係数について吟味する。相関行列については，表5-1から5-3に分割して示した。

表5-1　動機・様式・技能の下位尺度間の相関行列（1／3）

N = 497		動機				
		自己犠牲	関係維持	読み取り	自己表現	もてなし
動機	自己犠牲		.458 **	.211 **	.185 **	.380 **
	関係維持	.458 **		.295 **	.325 **	.420 **
	読み取り	.211 **	.295 **		.286 **	.189 **
	自己表現	.185 **	.325 **	.286 **		.254 **
	もてなし	.380 **	.420 **	.189 **	.254 **	
様式	相手への配慮	.354 **	.479 **	.450 **	.358 **	.313 **
	関係維持	.374 **	.644 **	.190 **	.274 **	.356 **
	もてなし	.438 **	.342 **	.161 **	.161 **	.607 **
	積極的表現	.109 *	.184 **	.147 **	.528 **	.261 **
	自己抑制	.351 **	.206 **	.230 **	.134 **	.114 *
技能	気遣い	.268 **	.296 **	.294 **	.278 **	.171 **
	自己表現	-.057	.006	.005	.301 **	.086
	読み取り	.001	.056	.218 **	.100 *	.093 *
	もてなし	.128 **	.164 **	.150 **	.163 **	.478 **
	自己抑制	.076	.017	.033	.035	-.041
	関係構築・維持	.090 *	.292 **	.137 **	.257 **	.228 **

（*p<.05　**p<.01）

表5-2　動機・様式・技能の下位尺度間の相関行列（2／3）

N = 497		様式				
		相手への配慮	関係維持	もてなし	積極的表現	自己抑制
動機	自己犠牲	.354 **	.374 **	.438 **	.109 *	.351 **
	関係維持	.479 **	.644 **	.342 **	.184 **	.206 **
	読み取り	.450 **	.190 **	.161 **	.147 **	.230 **
	自己表現	.358 **	.274 **	.161 **	.528 **	.134 **
	もてなし	.313 **	.356 **	.607 **	.261 **	.114 *
様式	相手への配慮		.533 **	.478 **	.318 **	.376 **
	関係維持	.533 **		.460 **	.356 **	.356 **
	もてなし	.478 **	.460 **		.265 **	.283 **
	積極的表現	.318 **	.356 **	.265 **		.092 *
	自己抑制	.376 **	.356 **	.283 **	.092 *	
技能	気遣い	.564 **	.390 **	.298 **	.197 **	.400 **
	自己表現	.063	.072	.082	.557 **	-.018
	読み取り	.235 **	.137 **	.109 *	.215 **	.117 **
	もてなし	.276 **	.252 **	.546 **	.315 **	.071
	自己抑制	.143 **	.126 **	.083	.021	.403 **
	関係構築・維持	.429 **	.389 **	.373 **	.483 **	.149 **

（*p<.05　**p<.01）

表5-3　動機・様式・技能の下位尺度間の相関行列（2／3）

N = 497		技能					
		気遣い	自己表現	読み取り	もてなし	自己抑制	関係構築・維持
動機	自己犠牲	.268 **	-.057	.001	.128 **	.076	.090 *
	関係維持	.296 **	.006	.056	.164 **	.017	.292 **
	読み取り	.294 **	.005	.218 **	.150 **	.033	.137 **
	自己表現	.278 **	.301 **	.100 *	.163 **	.035	.257 **
	もてなし	.171 **	.086	.093 *	.478 **	-.041	.228 **
様式	相手への配慮	.564 **	.063	.235 **	.276 **	.143 **	.429 **
	関係維持	.390 **	.072	.137 **	.252 **	.126 **	.389 **
	もてなし	.298 **	.082	.109 *	.546 **	.083	.373 **
	積極的表現	.197 **	.557 **	.215 **	.315 **	.021	.483 **
	自己抑制	.400 **	-.018	.117 **	.071	.403 **	.149 **
技能	気遣い		.205 **	.310 **	.371 **	.291 **	.422 **
	自己表現	.205 **		.337 **	.337 **	.069	.351 **
	読み取り	.310 **	.337 **		.220 **	.193 **	.236 **
	もてなし	.371 **	.337 **	.220 **		.052	.466 **
	自己抑制	.291 **	.069	.193 **	.052		.190 **
	関係構築・維持	.422 **	.351 **	.236 **	.466 **	.190 **	

（*p<.05　**p<.01）

動機尺度内の相関

まず動機尺度内においては，下位尺度間で相互相関が高く，特に関係維持と自己犠牲，気遣いが.350以上の相関を示している。すなわち関係維持を指向するものは，自分を犠牲にして相手への気遣いを優先する動機を持ちやすいことが示された。これは概ね妥当な傾向であると解釈することができる。

様式尺度内の相関

様式尺度内においても，関係維持がキー概念として他のすべての下位尺度と.350以上の相関を示していることが興味深い。どのようなコミュニケーション・スタイルを採るかにおいて，関係維持を指向することで相手に配慮し，相手をもてなすスタイルを採り，そして適切な自己表現や自己表現を指向することになることが示された。

技能尺度内の相関

技能尺度内においては，関係維持が，相手への配慮，自己表現，気遣いと.350以上の相関を示している。また，気遣いと相手への配慮の間に.350以上の相関が認められる。このことから，個人が認識する自己の能力として，適切な気遣いや配慮，そして自己表現を適切に行うことができれば，他者との関係性が維持できるという自信につながることが見て取れる。

動機と様式の相関

次に，動機尺度と様式尺度との相関について検討した。その結果，動機において自己犠牲が高いと，様式において相手への配慮，関係維持，気遣い，自己

抑制が高いことが示された。このことから，自己犠牲を大切だと思うことが，他者への配慮や気遣い，そして自己を抑制すること，関係維持を指向することにつながると言える。すなわち，動機として，自己犠牲をすることの重要性に意識が向くか向かないかが，実際のコミュニケーション・スタイルに大きく影響していることが窺える。

動機と技能の相関

また動機尺度と技能尺度との相関については，.350以上の相関を示したのは気遣い同士のみであった。これは相手を楽しませることが大切だと考える個人は自分にはそれができると認識していることを示している。一方で，他の組み合わせにおいては，有意な相関は認められるもののいずれも相関係数の値としてはそれほど高くない。すなわちコミュニケーションにおいて何が重要だと考えるかと自分が何ができると自信を持つかは概ね関係が薄いと言える。

様式と技能の相関

一方で様式尺度と技能尺度との相関について検討したところ，技能の関係構築・維持は様式の自己抑制以外と.350以上の高い相関を示している。すなわちより包括的な技能と捉えられる関係構築・維持の技能を有すると考えている個人はより積極的に，相手に配慮したり，相手を楽しませたり，自己を積極的に表現したりというコミュニケーション・スタイルを採りやすいと言える。

また，相互に類似した気遣い同士，自己抑制同士，技能における自己表現と様式における積極的表現の間に.350以上の相関が認められる。この結果は，自分の技能に自信が持てるからそういうスタイルを採りやすいのか，そういうスタイルを採っているから，技能に自信が持てるのか，本研究の結果のみからでは明らかではない。同様に，技能における相手への配慮と様式における自己抑制の間に.350以上の正の相関が認められるが，これも，相手への配慮ができると認識すると，自己抑制的なコミュニケーション・スタイルを採りやすいのか，あるいは自己抑制的なコミュニケーション・スタイルをとっていると，相手への配慮ができると自信を持つことができるのか，明らかではない。今後，実際に採っているスタイルと技能に対する自信についてはより詳細に検討していくことが必要となろう。

まとめ

以上のように，本研究では動機，様式，技能の３つの視点からコミュニケーションを捉え，それぞれに類似しているが完全に一致しているわけではない複数の下位尺度を提案した。今後この尺度を用いて，現代大学生のコミュニケーションについて，その変化も射程に入れながら明らかにしていくことを目指したい。

引用文献

足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄（2003）：携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係，教育学科研究年報，29，7-14.

藤本学（2008）：会話者のコミュニケーション参与スタイルを指し示すCOMPASS，社会心理学研究，23，290-297.

藤本学・大坊郁夫（2007）：コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み，パーソナリティ研究，15，347-361.

藤田文（2005）：子どもと大学生のコミュニケーション：コミュニケーションスキルに関する認識の変化を中心に，大分県立芸術文化短期大学研究紀要，42，117-129.

平尾元彦・重松政徳（2007）：大学生のコミュニケーション能力とキャリア意識，大学教育，4，111-121.

飯塚順一（2004）：短期大学生のコミュニケーション能力に関する質的研究：コミュニケーション教育プログラム開発に向けて，産能短期大学紀要，37，109-121.

磯友輝子・大坊郁夫（2005）：「話の上手さ」認知の社会的スキルと状況による相違，電子情報通信学会技術研究報告．HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎，105，1-6.

川口潤・渡辺はま・月元敬（2000）：携帯情報機器利用とコミュニケーション：大学生における携帯電話利用と伝達内容・被伝達者との関連，日本教育心理学会総会発表論文集，42，603.

川浦康至（2008）：大学生におけるカメラ付き携帯電話の利用とコミュニケーションに関する調査，コミュニケーション科学，28，141-152.

風間雅江（2009）：大学生におけるコミュニケーション手段の選好とシャイネスとの関係，人間福祉研究，12，51-60.

金城光（2006）：女子大学生の学業に関わるコミュニケーション能力と自己効力の関係についての実態調査，大妻女子大学紀要.-社会情報系,-社会情報学研究,15，235-249.

牧野幸志（2009a）：中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発（1）－中学生のコミュニケーション・スキル，精神的健康の性差，学年差の検討－，経営情報研究，17，1-16.

牧野幸志（2009b）：中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発（2）－中学生と大学生のコミュニケーション・スキルの比較－，経営情報研究，17，35-43.

牧野幸志（2010）：中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発（3）－中学生に対するコミュニケーション・スキル訓練の効果－，経営情報研究，18，1-9.

三宮真智子（2004a）：思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案：メタ認知の観点から，鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，19，151-161.

三宮真智子（2004b）：子どものコミュニケーションを考える－現状と課題，児童心理，58，874-879.

三宮真智子（2009）：コミュニケーション教育のための基礎資料：トラブルに発展する誤解事例の探索的検討，日本教育工学会論文誌，32(Suppl.)，173-176.

西迫貴美代・丸田真悟（2007）：鹿児島県における「コミュニケーション能力を高める」プログラム開発の試み-身体表現を中心に-，鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』，39，77-91.

岡本香・江川朋幸（2003）：携帯メディアコミュニケーションと大学生の友人関係態度との関連，日本教育工学雑誌，27(Suppl.)，137-140.

尾上恵子（2006）：大学生のコミュニケーション能力と感情の社会的共有行動の関連性について，一宮女子短期大学紀要，45，17-25.

尾崎かほる・久東光代（2006）：女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルと交友関係意識，日本女子大学紀要.　人間社会学部，17，73-85.

白井利明（2006）：現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴：変容確認法の開発に関する研究（Ⅲ），大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門），54，151-171.

高井範子（2008）：青年期における人間関係の悩みに関する検討，太成学院大学紀要，10，85-95.

山本政人・伊藤忠弘・竹綱誠一郎（2008）：現代大学生の友人関係と携帯メールによるコミュニケーション，学習院大学計算機センター年報，29，27-34.